

5. タオル業界への恩返し

受講者にはとにかく楽しんで縫製を学んでほしい

「タオル縫製士養成所」では、一般の人は無料で指導を受けることができる。申込方法は簡単で、村上雪美氏の携帯番号に電話をかけるだけである。タオルメーカーから派遣されてきた人は、タオルメーカーの負担で縫製を学んでいる。

各コースとも短期間で基本操作とタオルのヘム縫いができるように指導内容のスケジュールが組まれている。タオルが多様化している現在、タオルに特徴的なパイルをはじめ、ガーゼやシャーリングなど多種多様な生地を縫う必要があるが、基本さえしっかり抑えていれば、問題なく実践で新たなキャリアを積める。

村上雪美氏が指導する際に重視しているのは、とにかく受講生が楽しんで練習してくれることである。「ミシンの基本操作からはじめて、タオルが縫えるくらいまで丁寧に指導します。受講者の方には楽しくやってほしいですね。」村上氏は、受講生とのコミュニケーションを大切にしているため、受講生の人数に制限を設けている。

一般に、縫製加工する際は髪の毛が落ちないように帽子や三角巾、ヘアキャップを身につける。養成所でも受講生は黒い帽子を被る。村上氏もおなじ帽子を被る。小さなことだが、そこに一体感が生まれる。村上氏の根っからの明るさと親しみやすさは受講者にも伝わり、自然と楽しい空間ができ上がる。



黒い帽子を被って指導にあたる村上氏（左）と

受講生（右）



受講生は村上氏に積極的に質問したりデモンストレーションをお願いしたりする



練習用のタオルはおもに B 級品のタオルを活用している

タオルメーカーから直接譲渡される場合もあるが、基本的には今治タオル工業組合から提供されている

トトロの体にジャンプして、落ちないようにへばりつく感覚

養成所の指導者になって嬉しいことがあった。立場上、タオルメーカーの工場を見学する機会が増えた。ある日、コンテックスと（有）川又タオルの工場見学に訪れた。

村上氏の両親はコンテックス（当時は近藤繊維工業）で出会い、結婚した。コンテックスは、村上氏にとって家族のルーツと言って

もいい。コンテックスの工場見学の様子を村上氏はつぎのように表現してくれた。

いまの仕事で、コンテックスさんに見学に行けることになり、嬉しくてたまりませんでした。両親がかつて働いていた場所、おなじ敷地を歩いているとおもうと本当に胸がいっぱいで、もう死んでもいいとおもったくらい嬉しかったです。反物の匂い、出荷間近の商品、現場の雰囲気。そのすべてが、楽しかった子供の頃に時間を戻してくれるんです。

そして、川又タオルの工場見学でも、山積みになったタオルに感動を覚えた。

川又タオルさんの工場見学に行ったときに、工場の入り口の扉を開けたら目の前に反物（タオル）が沢山積んであって、その匂いや長さに感激してしまって、本当は走って反物に飛びつきたいぐらいでした。グッとがまんしました。イメージでいうと、映画の「となりのトトロ」のワンシーンにあるように、トトロの体にジャンプして落ちないようにへばりつく感覚です。

村上氏とタオル、両者は目に見えない糸で結ばれている。家業の浮き沈みをとおして「普通が一番難しい」と実感し、タオルをみたくないほど嫌いになった時期もあった。しかし、またこうして村上氏はタオルと向き合っている。タオルづくりに携わる人たちへ恩返しをしたい、少しでも役に立てるならその手伝いをしたいという気持ちで、毎日を過ごしている。「わたしなりの普通の日々を過ごしていることに感謝してがんばりたいです。わたしにとってタオルはいい思い出と悪い思い出の両方あります。でも、いまタオルに携わる仕事ができる嬉しいです。やっぱりタオルが大好きなんですね。」

人生は巡り巡って、原点に戻る。



母親が近藤繊維工業伸べ士として活躍していた頃の写真



父親（写真左下）が近藤繊維工業のソフトボール部に所属していた頃の写真

6. 好きな歌

いまでも前向きにがんばれるのは、歌があるから

音楽好きの村上氏には「好きな歌」がたくさんある。そのなかで魂のソングが、ハウンド・ドッグのアルバム『ゴールド』（1989年発売）に入っている『アンビシャス』（作詞：松井五郎、作曲：蓑輪単志）である。アンビシャス ambitious は「意欲をもって」「大望を抱いて」といった意味がある。明治初期に新島襄の招きで来日し「北海道開拓の父」と呼ばれる W. S. クラークが、札幌農学校で学ぶ若者たちに向けて「Boys, be ^{ボーイズ} ambitious」という言葉を残したが、この ambitious とおなじ英単語である。

ハウンド・ドッグは、1985年に発売された「ff（フォルティシモ）」が日清カップヌードルのCMソングに起用されてたちまち人気ロックバンドとなった。村上氏もCMソングでハウンド・ドッグの存在を知り、野外イベントでかれらのパフォーマンスを間近にみてすっかりファンになった。それまでは歌謡曲一筋であったが、ロックに目覚めた瞬間でもあった。

「アンビシャス」は村上氏が辛いとき悲しいときに元気をくれる応援歌であり、この曲を筆頭に大好きな歌があったからこそ、村上氏はこれまでがんばって生きてこられた。

「私がいまも前を向いて踏ん張れるのは歌があるからです。」

（完）

（文責・インタビュー：辻智佐子）

参考文献

今治市「広報今治 いまばり」No.354（2023年11月号）、2-3頁。

今治市立北郷中学校「学校沿革史」

（<https://kitago-j.esnet.ed.jp/history>）。

佐藤巴南「今治市 タオルの端っこがそんなに大事なの!？」NHK 松山放送局、2023年8月16日。

東京信用交換所「日本繊維商社銘鑑」（1970年度版）、東京新興交換所、1969年。

波方町立波方小学校『波方小学校百年誌』波方町教育委員会、1986年。

読売新聞「タオル縫製の技術 伝授」2023年7月13日、28頁。

編集後記

夏に生まれた雪美さんは、真夏の太陽のようにキラキラとして明るく、たくましく、そして情の深い人です。

家族で協力してタオルをつくりつづけてきましたが、両親の死に直面し、タオル工場は縮小を余儀なくされました。明るくハイカラだった母親、現代風に言えば「イケメン」で誠実な父親。人生の素晴らしさを教えてくれた両親の死は、雪美さんにとって言い知れぬ悲しい出来事だったに違いありません。タオル嫌いになったことも一時期ありますが、どんなときもタオルは雪美さんの人生とともにありました。いまでもこうして、タオル縫製の指導者として日々、タオルと向き合っています。

インタビュー後、養成所で指導風景を見学させていただきました。少人数制で目の行き届く指導をおこなうのが雪美流であり、ごく自然によく生徒を褒めます。インタビュー前にわたしも雪美さんに勧められるがまま、試しにヘム縫いをやってみました。予想を裏切らず下手くそなのですが、雪美さんは褒めてくれました。雪美さんに褒められると、下手なステッチも上手にみえてくるのが不思議です。「この人の指導を受ければ、9日間で縫製のイロハを修得できそうだ」と、あっという間の信頼感。雪美さんは知らず知らずのうちに周りの人を幸せな気分にする魔法をもっているのかもしれない。今治のタオル工業の未来に、太陽の明るく強い光が差し込んできました。



次回の「タオルびと」

「タオルびと」の41人目は、七福タオル（株）代表取締役の河北泰三氏である。河北氏と言えば「落語」である。落語で培われたセンスは、七福タオルの製品にも反映されている。時代のニーズをいち早くとり入れ、つねに新しい「モノづくり」を発信しつづけている河北氏に、タオルとの深い縁について話をうかがう。

